

# *Kie miozotas memor'*

verkita de Ed Borsboom  
eldonita de Internacia Esperanto Instituto, 2017  
165 paĝoj

本書の著者のEd Borsboomという名前を見て、私は30数年前に故坪田幸紀氏と一緒に読んだ“Vivo de Lanti”の著者であることには気がついたが、それ以上のことは全く知らなかった。本書の紹介によれば、著者は1936年オランダ生まれで、1951年以後のエスペランチストである。本書は彼の手になる人物エッセイを集めた本で、有名無名の32人のエスペランチストについて、さまざまな雑誌に発表された追悼文やインタビューなどの短い文章を収録している。B6判よりもやや小さい判型、165ページのつつましい小冊子で、発行部数はわずか220部だが、それぞれの人物にまつわるエピソードを取り上げ、その人となりと時代のありようを照らし出す筆の冴えは見事である。私などの手には余る本ではあるが、恐る恐る紹介を試みたい。

著者は本書で、カロチャイ、トンキン、ボウルトン、ヴァランギャン、ランティなど、著名なエスペランチストについても取り上げている。カロロ・ピッチュ、エリ・ウルバノーヴァの小説の分析もある。藤本達生・ますみ夫妻やいとうかんじさんもチラッと登場してくる。また、著者は、アンドレオ・チェとの関わりが深いので、彼についてしばしば言及している。チェは、直接教授法、いわゆるチェ・メトードを創出し、長くオランダに住み、本書の出版元でもあるIEI (Internacia Esperanto- Instituto) の指導者だった人物である（なお、著者にはチェの伝記“Vivo de Andreo Cseh”もある）。

内容について少し紹介しよう。例えばドレーゼンの複雑な人格について、著者は具体的なエピソードや人物評を引用しつつ淡々と描いていて面白い。1927年にダンツィヒ（現グダニスク）で行われた世界エスペラント大会で、ワルシャワのザメンホフの墓や旧居を訪ねる遠足が行われた。そのとき、他の参加者は三等車に乗っていたのに、「同志」ドレーゼンだけはひとり一等車に乗り、しかも黄色い手袋をはめていたという。また、Walter Kampfradという人物は、著者とのインタビューで、ドレーゼンはブルジョア的で、裏切者だったと評しているそうである。もっとも、この人物は、戦前はEKRELO (Eldon-Kooperativo por Revolucia Esperanto-Literaturo) の創立者としてマルクス主義やソ連に関するエスペラントの出版物を刊行したが、戦後は社会主義東ドイツで検察官として体制側のエリートになり、エスペラントからは遠ざかったのだが（なお、彼あてに、エスペラントを高く評価する



草稿が届いていて、その差出人が学生時代のブランケだったというエピソードも紹介されている)。

もっとも、本書で取り上げられているのは、そうしたエスペラント界の「名士」ばかりではない。むしろ著者には、無名の人たち、没後は忘れられた人たちを忘却から救いたいという強い意図があり、とりわけチェ・メトードに基づいて世界各地で精力的にエスペラントを教えた人たちのことを感慨深く回想している。エスペラントに熱心なあまりチェらとの確執を生じて破門され、やがて急死した女性(彼女は *eminenta nekonato* と評されている)。オデュッセウスのごとく世界各地を放浪して(*odisee vagante*) エスペラントを教え、その没年も定かでない男性。そうした世間的には恵まれなかった情熱的なエスペランチストたちの人生を、著者は残された書簡などに基づいて丁寧に辿っている。また、父親が抵抗運動に関わって殺され、母親がワルシャワ蜂起のなかで死亡したポーランドの女性も登場する。彼女は60歳でエスペラントを学び、その後20年にわたり世界各地でエスペラントを教えたという。

以上の紹介からも見当がつくとおり、本書で取り上げられた人たちの多くは、第一次世界大戦から戦間期を経て第二次世界大戦に至る激動の時代に多難な人生を辿っている。ソ連のドレーゼン、ヴァランキン、ミハルスキらは、大粛清のさなかの1937年に殺されている。また、著者が住むオランダも、第二次大戦開戦の翌年の1940年5月、ドイツ軍に宣戦布告なしに侵攻され、それから5年にわたって占領下に置かれ、エスペラントは「危険な言語」として弾圧された。オランダのエスペランチスト Leendert Deij は、労働者エスペラント運動の同志だったユダヤ人の男性がアウシュヴィッツへ送られ、殺害されたのを見殺しにしたことへの痛みを持ち続け、戦後、“*Al la juda foririnto*” という名高い詩を書いた。これは“*Esperanta Antologio*”に収録されている(同書に作者が Lodewijk Cornelis Deij とあるのは誤りだとのこと)が、本書でこの詩の作者に出会って、私は深い感動を覚えた。

あるエスペランチストは、「エスペラントを知ったことが私の人生の一里塚となった」、「エスペラントは私の人生を変えた」と述懐していて感慨深い。なお、本書のいかにも詩的な書名は、ミハルスキの詩 *El Ciklo “Frenezo” VI* の一節からとられており、*miozoto* はワスレナグサのことである。文字どおり *neforgesumino* と呼ばれる。PIV の *miozoto* の項には、*populara simbolo de fidela neforgeso* という説明がある。また、本書はウルリッヒ・リンス氏に捧げられている。

(La Movado 2018年7月号掲載。なお、転載にあたって一部加筆修正した。)